

# 徳富蘇峰記念館

目録——(26)

## 実業家の書簡展

展示期間◇平成二十一年一月七日(水)〜十一月三十日(月)

今年の特別展は「実業家の書簡展」である。

蘇峰と交友のあった実業家三十三名の書簡を展示した。

美術品は、徳富蘇峰の書や秋田角館出身の日本画家・平福百穂の作品を展示した。

### ① 実業家の書簡

洪沢 栄一 (一八四〇〜一九三一 天保十一〜昭和六) 武蔵国

幕末の幕臣。明治・大正期の実業家。第一国立銀行や王子製紙・日本郵船・東京証券取引所など多種多様の企業の設立・経営に関わり、日本資本主義の父と呼ばれる。社会福祉や教育にも力を注ぎ、東京養育院、商法講習所(現一橋大学)を創設した。

〈展示書簡〉明治二十一年八月二十四日付

恭啓 陳者同志社通則草案式部御送附被下正二落掌仕候 嘗て大隈伯之邸ニテ拝見仕候節ハ尚此他二二種之規則有之候様相覚候 若シ有之候ハバ右二種も御送附願度奉希望候 右得貴意度繁忙中代筆を以て申進候也 草々  
洪沢 栄一

徳富猪一郎様

(註) 東京第一国立銀行便箋使用

洪澤栄一翁に就いて

人為さざる所ありて始めて為す可しとは洪澤翁に於て之を見る。翁は権勢を要めず、富貴を食らず。唯だ他人の未だ開拓せざる荒地に向つて其の力を効し。此の如くして利用厚生、開物成務の爲めに一生面を開いた。而して天下は翁を偉大なる老

成人とし期せずして翁に集つた。(『人物景観』徳富猪一郎著)

武藤 山治 (一八六七〜一九三四 慶応三〜昭和九) 愛知県

大正・昭和期の実業家・政治家。慶応義塾卒。鐘紡社長、時事新報社長。十九歳のとき和田豊治と共に渡米。慶応の同窓の二人はある時までほぼ同じようなコースを歩み、明治末年から大正にかけて財界の「両治」といえば、武藤山治と和田豊治のことだった。武藤は昭和九年帝人事件で政財界の汚職を糾弾中に狙撃され死亡した。

〈展示書簡〉大正四年十一月十三日付 播州舞子浜より

拝復 益々御清栄奉賀候 陳者這度叙位恩命乃御沙汰に接し申候に就テハ早速御鄭重なる御祝詞に預り洵に難有御厚意の段奉謝候 右不取敢御請旁御礼迄申上度勿々敬具  
十一月十三日 武藤山治

徳富猪一郎様侍史

和田 豊治 (一八六一〜一九二四 文久一年〜大正十三) 大分県

明治・大正期の実業家。慶応義塾卒業後、武藤山治と共に渡米。明治二十四年帰国し日本郵船へ入社。中上川彦次郎に認められて三井銀行に入り明治二十六年鐘ヶ淵紡績へ転じて支配人となった。明治三十四年三井を去り、富士紡績に迎えられ、専務取締役として不振だった同社の再建に尽力した。明治三十九年、東京瓦斯紡績と合併して富士瓦斯紡績となり、大正五年同社社長となった。鐘紡の武藤山治と並んで、紡績業界の巨頭として認められた。面倒見の良さから、洪沢栄一に続く「財界世話役」といわれた。

〈展示書簡〉大正四年十一月四日付 (印刷)

拝謝御祝辞 和田豊治

実業家の気品 和田豊治氏を弔す

実業家の本分は、金儲けの上手のみではない。金儲けの上手は、実業家には当たり

前の事。それが下手では、到底実業家の資格は無い。実業家に取る可きは、其の能く集むる力と、能く散ずる力である。其の富を作るの材と、富を用ふるの材と両立する所に、実業家の妙趣が発揮せらるゝ。而して更に其上に、一種の高尚なる気品なるものありて、茲に花もあり、実もある実業家が出て来る。吾人は和田豊治氏の死を、世人が惜しむの偶然ならざるを見る。若し単に経営の材を求めば、和田氏以外に、其人なしとせず。然も彼は其父が漢学者であつた丈に、自ら一種の気品を具へていた。彼の大膽小心と、其の統率、組織の能力とは、自から彼をして今日あらしめたるに相違あるまい。併しそれ以上に、彼をして今日あらしめたるは、彼が然諾を重んじ、後進を愛撫し、其の行徑が、利己本位でなく、奉仕的生活を以て、始終したりと云ふに帰せずんばならず。(後略) 大正十三年三月八日

〔人物偶録〕(蘇峰叢書第六冊) 徳富猪一郎著

岩波 茂雄 (一八八一—一九四六 明治十四—昭和二十) 長野県

大正・昭和期の出版人。大正二年神田に古本屋岩波書店を開き、翌年出版にも手を広げ、夏目漱石の『こころ』を処女出版。昭和二年岩波文庫、昭和八年岩波全書を発刊するなど、出版界に独自の地位を開いた。

〈展示書簡〉昭和二十一年三月三日付(印刷) 熱海市伊豆山借様荘より

謹啓 寒さ漸く薄らぎ来り候處益々御健勝の段奉賀候

小生先般文化勲章を拝受せしにつきては早速御懇篤なる御祝辞を賜はり寔に有難く茲に當時の心境を敍して御礼に代へ申候 小生事昨秋長野にて発病し其後快方に向ひ此程熱海に静養中の處去月八日来客と共に寝に就きたる後 鎌倉の宅より電話あり甚だ不明瞭なるも「特別の御沙汰ありたれば文部省に十一日午前十時半までに出頭すべし」とのことのみ漸く聞取れ申候 初めは何の事か判明に苦しみしも当日は紀元節なれば小生の縁故ある財団風樹会に御下賜金でもあるかと存候ひしが又以前に噂に上りし文化勲章にも思ひ及び若しそれならば小生としては他人の牛蒡にて自分の法事をするが如くに考へられ負けず嫌ひの癖ある小生は必ずしも是を快とせず公表せざる前にそつと拝辞致したく九日早朝客の帰京するに頼み着京早々店の者に萬々一文化勲章であつたなら拝辞の手続を即刻執るやう言ひつけると同時に小生は鎌倉まで帰れば何かが分明的なことと思ひ十一日帰る予定を早めて九日夕刻鎌倉に戻り候 途中先輩を訪ねて思ひ当る節などもありしが鎌倉の家に帰り小生を待ち居る共同通信社の記者より初めて文化勲章なることを確め申候 そのうち店より秘書帰り来り小生の言附を聞くと同時に拝辞の手続を申出しが既に御裁可済みのこととて拝辞出来ざりしと申候 斯くて十一日文化勲章を有難く拝受致し候が実の處我々の著者たるべき学界や芸術界にて一世に卓絶し

た人に伍して小生の如き一町人が文化の一配達人たるに過ぎざるに是を戴く事は餘りにも光榮であり恐縮であり身にピッタリせぬものあるを感じ申候 考へてみればこの間まで多少とも国のため世のためになつたかと思はれる出版物により小生の店は種々の厭迫を受け来りしが最近に於ても何等の理由なくして小生の部下の者は拘引され百日間も留置されあらゆる拷問を加へられたるが敗戦と共に拘留の要なしと釈放されたる事實有之候 よく調べてみれば是は同業中央公論社改造社の事業を廃絶せしめしと同様に岩波書店を潰滅せしめんとする意図の前提とわかりたる次第に御座候 小生自身も尊敬する著者津田左右吉博士と共に告訴され囹圄に入れらるべき身でありしにも拘はらず同一の理由にて最高の国家勲章を戴きしことは価値の転倒した世の出現により初めて可能となりしことに所謂百八十度の回転とも申すべしかと存候

惟ふに封建時代以来士農工商と称し町人の社会的位地の最も低かりしは實際の町人の心掛がよくなかりしことに基くとはいへ当然の社会的義務を尽す場合には町人と雖も賤劣なる職業にあらざるべしといふのが小生の考にて小生は創業以来衆町人としての心掛を悪くせざるやうに努め来りしつもり候 是が幾分とも町人の社会的地位を高むるに役立ちしとすれば小生の本懐とする所に御座候 元来小生は何も日本文化に貢献せんなどと大それた考にてこの職業を撰びしに非ず 青年時代人生の煩悶児として所信なく所依なきに人の子を賊ふ如き重大な責務を負へる教職にある事を恥ぢ消極的に平安なる晴耕雨読の生活に入らんとせしが当時三十歳を越えしばかりの若さなりし故老後の思い出にもと失敗を覚悟してこしかけに市民の境涯を撰びしに候 つまり此の職域に於ては他の責任大なるものとは異なり品物を撰び求むる人に比較的安く売ればそれにて一應その社会的任務を果して心の安きを得べしと存せしに候 それが此の生活に根が生えて今日までも続き社会的関係さへも生ずるに至れりとは自らも予想外に候 初め市民生活に入りし時小生としては荒物屋にても乾物屋にてもよく郷国信州の先輩中村屋の相馬氏御夫妻に素人にては商売が出来るかと同じに行きたる時の如き近所に乾物屋の売物があるが如何かと言はれ帰途これを覗きし事も有之それが古本屋を開業せしは大正二年神田の大火の焼跡に昔職を奉じた学校に出入せし尚文堂の貸家が建てられしとこれまでの生活が本に縁故ありしと又簡単に出来たが故に候 今日小生は日本の文化に寄与せしなどと数多くの人から言はれ候も誰一人として町人道のために尽くしたと言つてくれる人なきを不思議に思ひ居り候 若し小生に何らかの文化的功績ありとすればそれは小生が市民生活の結果にして是をかれこれ言はれるよりも自分の初めより一市民として独立自由を愛し偽り少き生活をするに努め最低とされ来たる町人の社会的地位に寸尺の貢献ありしと言はれるが寧ろ本懐に存候 故に市民勲章とでも称するものありて是を小生に与へられるとせば小生に取りて全然不恰好の事でもなかるべく此度の如く気のひける事もなかるべしと存候

我が日本は存来国家的意識徒に強烈に国家の名を以てすれば如何なる事でも美化されるといふ程国民的意識はありすぎたるも生命を重んじ個人入の尊厳を主張する市民とか町人とかいふ意識は至つて乏しくありしが是は我が國憂患の一つにて小生の尊敬せし故海軍中将波多野貞夫博士の如き国家の名を以てすれば一切が美化される現状だが国家は罪惡の源泉であつてはならぬと常に言はれ居り小生も是には同感にて正邪善惡は国家の名を以てして曲ぐべからざるものと存候

今より十一年前世界一巡の時小生は独逸に於てナチの国旗がローマ教会の上に翻るを見て非常に不愉快なる念を起しヒットラーの政權久しからずと感ぜしが今日当然の帰結を見候 是に反し英國戴冠式に於て皇帝が跪拜し僧正より冠を戴く光景は我々の心をして自然に頷かしむるもの有之候 實にこの時の僧正は神の使として天命を皇帝に授けたるもの候 我が日本は東海の孤島たる武陵桃源とも言はるべき所に國を建てて二千年海外と殆ど交渉ある事なく井底の蛙の如き生活を続け来り候 日清日露の戦勝に酔ひ明治天皇が天地神明に誓ひ給へる古今東西に通ずる御誓文の大精神に背き自負驕慢の限りを尽し世界に於ける我が国家的地位と文化の程度を忘れ自ら神の選民と八紘一字と稱して世界に光被せんと致し候

今開闢以来の屈辱を受けしは水の低きに流るるが如く当然であつて無条件降伏は我が國の支配階級又國民の増長心を粉碎する昭和の神風と存候

世に真理より強きものなく絶対者より優るものなし 真理の忠僕であり絶対者に対し飽くまで敬虔であるべきは人類の義務なるが不幸にして我が日本人には新奇を慕ひ流行を迫ふ傾多く本質に徹底し絶対者を怒るる心乏しきは残念に候 官尊民卑の風の如き今日これを可とするものは絶無と言ひ乍らも尚封建の弊風隠然牢固たるものあり 官吏の中には実業に従事する我々の尊敬すべき人の正しき主張を町人の癖に何を言ふかといはれる事の如き今日も尚実例尠からず有之遺憾に存候 小生は町人は勿論乞食の言と雖も正しき主張には此の世の誰もが服従せねばならぬと固く信じ候

是より我々日本國民は封建の弊風を根絶し人類の理想を目標として正邪善惡の規準に生くるが人間最高の義務と心得「自ら反みて縮くんば千萬人と雖も我往かん」の氣魄を以て進むべしと存候 しかるに近來便乘主義の徒多く偽裝民主主義を振りかざして聯合軍側の意を迎へんとする者多きときは残念の至に候 眞の民主主義は小生が三十餘年前感激なき生活の繁縛を脱し自由と独立と平安を一市民たる生活に求めて町人となりし当時の心境と異なるものに非ざるべく人道正義を信じ人類の理想に直往邁進して他を顧みざるこそ却てマックアースー元帥の最も喜ぶ態度なりと信じ申候

無条件降伏は軍閥財閥官僚にのみ帰すべきにあらず彼等をして跋扈せしめたる國民一般も亦その責の一端を頷すべきものにてやがて課せらるべき賠償が幾何なりとも高価なる東條に非ざるやう新日本建設に全国民協力せねばならぬと存候  
今回小生の文化勲章を拝受するや祝辞を寄せられる方の意外に多く反響の予想外

に大なるには実以て喫驚致し候 従来勲章なるものは軍人と官吏の年功者にのみ与へらるべきものと一般に思はれてゐたためか小生を知る人は勿論の事全国に互り知らざる多くのより限りなく祝辞を給はり「当然の当然なり」とか「何ぞそれ遅かりしや」とか或は「世は明朗になれり」とか殆ど我が事の如く喜ばれ来り候 今回の授章は固より畏き思召にて恐懼に堪へざる所なるもこれを可能ならしめしは全く小生の事業につき社会民衆の御支持を得たるによると感謝に堪へず候 今にして小生は勲章拝辞の間に合はざりし事を寧ろ喜ぶ心持に相成居候

出版は重大なる社会責務を負へる教育事業なるにも拘はらずやとすれば営利の具に供せらるる慮有之候 「当たる」「当たらぬ」などいふ卑陋なる言葉が今も尚白昼公然稠人広座にて聞かるる如きは甚だ残念に候 此の職業に於ては其の公共性に鑑み營利を以て第一とすることだけは差控ふべきかと存候 出版は賭博に非ずとは小生が従来申し来れる處に有之我等同業相戒めて出版の正道に直進致したきもの候 今後とも何分皆様の御指導を煩はしたく茲に素懐の一端を述べ御礼申上候 敬具

三月三日

徳富猪一郎様

（註）手紙の始めペン字直筆で「御病氣御快復の速なるを奉祈候」とある。

岩波茂雄

正力 松太郎（一八八五—一九六九 明治十八—昭和四十四）富山県

昭和期の政治家・実業家。東大卒。内務省に入り、敏腕な警察官僚として活躍した。後藤新平の資金援助で、読売新聞社の経営権を取得し、社長に就任。経営不振を克服した。又読売巨人軍を創設してプロ野球を育成した。終戦直後に起きた読売争議中にA級戦犯容疑者として逮捕されたので、後任を馬場恒吾に依頼する。昭和二十四年にはプロ野球の2リーグ制を提唱、二十八年には日本テレビ放送を開始させた。昭和二十九年に、正力は蘇峰を新設のテレビ塔に案内した。

〈展示書簡〉昭和二十年九月五日付（速達） 京橋区築地本願寺内より

先生 御親書有難う御座ります。時局に就きましては、無念の二字の外申上ぐる言葉もありません。只だ今更ながら軍略と政治との一致せざりしこと、軍、官共に指導者に実力を欠きしことは残念であります。次に弊社も八月十五日正午以来、御茶の水の地下工事を中止しました。目下読売別館（旧報知社屋）と本館の復旧に毎日百名余の鉄工、大工、人夫が働いております。本月十五日に別館に移転し編輯局、業務局、工務局の

事務を執ります。同社屋は幸に地下、及一階、二階が焼失せるも三階四階五階が無事でありましたので、地下室、一階、二階の複旧共に三階以上の貸室の人々に明渡しを受け之を使用すること致したのであります。輪転機は十七台を焼失しましたが幸にも一生懸命の努力にて本月末少くも四台の高速度輪転機を読売本館の工場に於て運転開始の運びに至るかと思ひます。何卒ご安心ください。左様なら敬白 正力生徳富先生

二伸 仰せの如く八十八才の御祝で楽しんで居ります。神二念じて居ります。拝顔の栄を得度く思ひましたが遠路心二任せず甲府支局長を伺せました。御許しください。拜

久原 房之助（一八六九〜一九六五 明治二〇昭和四十） 山口県

明治・大正・昭和期の実業家・政治家。森村組を経て、明治三十五年藤田組を設立。日立製作所、久原商事などを設立し、久原財閥を築く。昭和二年義兄の鮎川義介に実業の分野を委ね、政界に進出。通信大臣、立憲政友会総裁を務めた。

〈展示書簡〉大正三年二月五日付 兵庫県武庫郡より

拝啓 益御清勝奉大賀候 只今中谷氏被来貴著三種御送與を蒙り御懇情千萬難有厚く御礼奉申上候 緩々拝見相楽事と存候 就八遠からざる内上京 拝芝御礼申上候 先八不取敢右申述度如此二御座候 早々敬具 房之助 徳富老台 梧下

鮎川 義介（一八八〇〜一九六七 明治十三昭和四十二） 山口県

大正・昭和期の実業家・政治家。久原房之助の義兄。日産コンツェルンの創設者。芝浦製作所に勤めた後、アメリカに渡り鑄鉄製作技術を研究して帰国。明治四十三年には井上馨の援助で戸畑鑄物株式会社を設立。大正九年に久原より久原鋳業系列企業の経営を引き継ぎ、昭和三年社長となり日産コンツェルンを形成した。

〈展示書簡〉昭和三十年一月一日付 （自身の写真年賀状 印刷）

賀正 この程帝国石油株式会社社長に就任致しましたが、今後も引続き中小企業の助成、道路網の改善等国家経済を根基とする社会事業のために尽瘁致し、各位のご期待にそいたい所存であります。

昭和三十年元旦 東京都千代田区紀尾井町六

鮎川義介

〔註〕冊子同封「中小企業助成計画」

安川 敬一郎（号・撫松）（一八四九〜一九三四 嘉永二昭和九） 筑前（福岡県）

明治時代の実業家。明治鋳業社長となり、他に安川電機、九州製鋼、明治紡績、黒崎窯業などを創業した。明治四十年には明治専門学校（九州工大）を創立。安川家は筑豊御三家の一つである。（筑豊御三家とは福岡県中部の筑豊地方に地盤を置く地方財閥、麻生・貝島・安川のこと。）麻生財閥の麻生太吉は庄屋出身、安川財閥の安川敬一郎は福岡藩士、貝島財閥の貝島太助は炭鉱夫といったように、それぞれ出身の違いはあるが、三者とも埋蔵されていた明治初年の筑豊炭田採掘から身を起し、蓄えた財産を元手に政界への進出や他の産業への経営・投資を行った。

〈展示書簡〉大正（ ）年四月二十三日付 福岡県戸畑市より

拝啓 昨夜八頗る御迷惑之事 拝察仕候 野生八言語道断之失礼とは存じながら平常医戒ノ可及的嚴重二八時半から九時二就寝 而も此際腰部温療等ノ要有之候為め貴高兄を置去りとは失儀なるを知らざるに非ざるも勝手を任り候段中に御寛恕被可下候 尚当分遠距離旅行を被禁候為御見送をも可致苦なるに九時十五分にて退福候事とて重ねの欠礼申訳次第無之御座候 頓首再拜 安川撫松

四月念三

徳富蘇峯先生

貝島 太助（一八四五〜一九二六 弘化二大正五） 筑前（福岡県）

明治・大正期の炭鉱実業家。幼少時から坑夫となり、明治三年から炭鉱業に従事、西南戦争による価格の暴騰で巨利を得た。日清戦争による好況で、明治三十一年貝島鋳業合名会社を設立。石炭事業に専念し「炭鉱王」と称された。

〈展示書簡〉大正四年十一月十四日付

謹啓 今般曠古の御大典に際し老生儀特旨叙位の光栄に浴し唯々恐懼の

外無御座候 右二付御祝詞を辱ふし奉感謝候 不取敢御挨拶申上度 如斯御座候 敬具

大正四年十一月十四日

貝島太助

徳富猪一郎殿

大原 孫三郎（一八八〇〜一九四三 明治十三〜昭和十八） 岡山県

大正・昭和期の実業家。倉敷紡績創立者大原孝四郎の次男。明治三十年東京専門学校に入学。明治三十二年岡山孤児院の創設者石井十次を訪問し、その精神と事業に共鳴する。明治三十四年東京専門学校を中退し、帰郷。その翌年倉敷日曜講演会を開設。多数の著名人が登壇し、明治四十五年には蘇峰も倉敷に招かれ講演した。この講演会は大正十四年まで七十六回開かれた。明治三十九年倉敷紡績の社長に就任。のち経営に手腕を振るい関西財界の第一人者となる。大正三年農事改良をはかり、自作農創設を提唱し、大原農業研究所に発展させた。戦後は岡山大学農業生物研究所となる。大正八年、大原社会問題研究所を大阪市に設立し、日本の労働運動研究の一大拠点とした。戦後法政大学大原社会問題研究所となる。大正十年に倉敷労働科学研究所を創立。のち日本労働研究所となる。昭和五年大原美術館を開設し、西洋の名画を収集した。同年中国銀行を設立し、頭取となる。

① 大正三年二月八日付 日向国児陽郡 茶白原孤児院より

謹啓 春寒ノ候ニ御座候處益々御清福奉賀上候 然ハ此度孤児院長石井十次氏永眠被致御同様遺憾と奉存候 随テ同氏の遺囑ニより来院現状取調居候處中には急を要し候もの有之甚夕僭越ながら多少臨機の処分不到候てハ不相成候点御座候ニ付不悪御承知置被下度 今後の施設ニ付てハ遠からず御協議可申上候此如御了承願上候 早々頓首

二月八日

大原孫三郎

② 大正六年四月二十六日付 備中国倉敷町より

肅啓 此度岡山孤児院創立三十年記念会開催仕候ニ付ては御繁忙中特に御臨席被成下尚又記念講演会ニ於て御講演を辱し難有奉深謝上候 御高底ニ依る諸事都合二相了り候事ハ誠ニ御同喜ノ至りに御座候 御滞在中央失

相重ね候段御海容被成下度候 先ハ右御礼迄如斯御座候 早々頓首  
四月二十六日  
徳富先生侍史  
大原孫三郎

③ 大正七年十二月三日付 備中国倉敷町より

肅啓 日増寒氣相加申候處益々御清福奉賀上候 然ハ過日ハ參上仕候處御多用中種々御高教を辱し乍毎時御厚情奉謝上候 帰途京都に於て更ニ河田氏二面談仕候 研究所ノ件ニ付打合せノ上御高示ニ遵ひ同氏ニ社会問題部の幹事と申す名義にて一切の計画及び事務ノ進行御擔任被下候様御依頼申上候御快諾を得申候 右二付更ニ尊台よりも可然御言添願上度候 就てハ過日御噂被下同氏ニ対する報酬ノ義ハ将来時々御打合せノため時々大阪辺まで御来臨相願候様ニ相成候事と奉存候ニ付き夫等の費用を纏めて月額百円差出候事ニ御承諾被下様御手数尊台より御取成し被下度候 先ハ右御礼迄如斯御座候 早々頓首

十二月三日

大原孫三郎

徳富先生侍史

益田 孝（号・鈍翁）（一八四八〜一九三八 嘉永一〜昭和十三） 佐渡（新潟県）

明治・大正期の実業家。文久三年幕府の使節に随行してフランスに渡る。維新後大蔵省に入るが、明治六年退官し、先取会社副社長に就任。明治九年三井物産の社長となり、三井財閥の基礎固めに尽力した。中国の利権に熱心で、辛亥革命の時には、満州の買収計画まで立てた。大正二年 森格、洪沢栄一らとともに中国興業を設立。また茶道復興に尽力し茶道具など数千点の美術品を収集した。晩年は小田原に住み、養鶏事業や養魚事業などの傍ら、茶道、書道に親しみ悠々自適の生活を送った。

① 明治（ ）年一月九日

拝啓 陳者今般帰朝されたる新占領地行政長官小村寿太郎氏を聘し何彼と新占領地ノ実況承度候付御差支無之致候 明後十一日午後五時東京俱樂部まで御来臨被成下度候 尚午御面倒御来否如何至急御一報願上候 先ハ御案内まで如此ニ御座候 頓首

一月九日

益田孝

徳富猪一郎様 貴下

② ( ) ( ) 年三月十七日付

拜啓 陳者新鴻演述会ハ是非御出張被成下候様一同ノ懇願御容れ被下度  
もし此度ノ懇願御聞無之時ハ後援会ニ関係ノもの甚た不満足を引起し可  
申候 殊ニ政府の見方なりとて少々ジエロシーもある処故今尊台ノ為メ一  
同と不和を起し候も不得一策なり 矢張共に御尽力被下候事ニ相願候 越  
後方面ハ東京の新聞ノ第一ノ市場なり御演説被下候ハハ何寄ノ廣告  
ニして大ニ帰依するもの共相増し可申し候 貴紙の為メニも可在之候ニテ  
ハ以御承諾被下度倫に御奮発奉願上候 右ハ小生罷出内々愚見陳述御願可  
仕候処今日時間無之以書中露骨ニ申上候 御聞届ノ御一書奉希候  
三月十七日  
徳富猪一郎様  
躍起組ノ一人 孝

尚々御承諾不被下候而も尚貴兄並貴紙の為メ其まゝニハ己み不申候 松方  
井上両伯 桂伯等寄り大ニ運動可致候彼是拜し候 御承諾被可候  
強迫の恐はも時節柄なり

③ ( ) ( ) 年十二月二十五日付

拜啓 昨夜ハ御多忙ノ処尊来を忝し大幸不遇之候 扱甚輕激ニ御座候へ共  
包ミ金員例ニより為御歳暮差出度御笑納被下度 余ハ拝顔ニ讓候 勿々頓  
首

十二月二十五日 メレークリスマス 孝拝

徳富老台侍史  
尚々米國貨買入も今年ハ初而端緒ヲ開き申候 全御丹誠ニ依るところ難有  
奉存候

新聞経営上の大苦心 (明治三十一年頃)

(前略) 予は初めて借金の恐るべく、債鬼の恐るべきを覚えた。(中略) 印刷機  
械、其他に対する支払は、余儀なく延期せねばならぬこととなつた。然もその相手  
は三井物産会社であつたから、ひしひし催促せられて、今は予も百計に窮したか  
ら、自ら当時日本橋にあつた三井物産会社に赴き、益田氏に面会し、事情を訴へ、  
「到底今急に機械代などを皆済するわけにはゆかぬが、寧ろ此際国民新聞社を御身  
と予との共有となし、先づ半分だけを持って貰度い」といふことを提議した。益田  
君はこの話を聴き、「いやそれは貴君としては尤なる申分である。併しながら自分  
は既に或る有力なる新聞の部分的持主であつたが、何時の間にやらそれも無くなつ

た。僕は『国民新聞』の半分を持ったとしても、筆を持つ人は貴君であり、貴君と  
僕の意見が一致する間は、何等の差支は無いが、万一意見が一致せざる場合には困  
つたことになる。貴君は筆の持主であるから、どしどし思ふところを語るだろう  
が、自分にはさういふことは出来無い。それでこの提議だけは、折角の申分である  
が、真平御免を蒙り度い」と云ふことであつた。考へてみれば、尤もなる話である  
から、予はその儘引下つたが、予が一切の内情を打明けて、話たる為であらう。  
その後は債務の督促も左程急激では無くなり、然も返済の方法も極めて寛大に取り  
扱はれたるは、予が今猶感謝するところである。(後略) (『蘇峰自伝』徳富猪一  
郎著)

福沢 桃介 (一八六八〜一九三八 明治一〜昭和十三) 埼玉県

明治・大正期の実業家。慶応義塾に入塾したのが縁で、福沢諭吉に見  
込まれ養子となり諭吉の次女・房と結婚した。明治二十一年アメリカ  
に渡りペンシルベニア鉄道の見習いをした後帰国。北海道炭礦汽船、  
王子製紙など三井系の会社に勤務。明治三十九年瀬戸鉱山を設立し、  
社長に就任。その後実業界で活躍し、幾多の事業を手掛けた。木曾川  
水力発電の開発には情熱を注ぎ、「日本の電力王」と呼ばれた。

① 大正十年十一月十六日付 下渋谷より

肅啓 秋冷之候 益々御清穆奉賀候 陳者貴著書態々御郵送被下御厚意に対  
し深謝仕候 千古不滅ノ大事業之を成功する先生の幸福不堪羨望候 過日  
木曾にて偶然拝眉の節先生は小生がシヨウジンする故に雨が降らぬと仰  
せられたる様ニ覚えたるが血の廻りの悪き小生何んだか解らずツイ御返  
事も不申上其俣に致し置き候處国民新聞に其注釈が載せられ居りハハ一  
と合点致候 先生ハ評判ににやわぬ野暮の男と思召しならんと汗を流し申  
候 小生ハ木曾川ニ仕事を致し居る故に蘇水と勝手に號をつけ候 先生は  
蘇峰なり気はずかしく候先ハ御礼申述旁々敬具 十六日夜 桃介  
徳富先生 硯北

② 昭和 (三) 年 ( ) 月二十四日付

拜啓 陳ハ昨今所勞引籠中ニ付乍失礼御書中御願申入候 木曾川発電事業  
ハ御嶽山ノ御蔭なることを記念致度謝恩塔建立の企致候 其の文句別紙ノ  
通り素人作り御一覽ニ供シ候 先生に御加筆御訂正を仰ぎ度御願申上候

敬具 二十四日

蘇峯先生侍史

福澤桃介

③昭和三年十月二十三日付

拜啓 益々御清安奉賀候 陳者先般ハ御嶽山謝恩塔碑文御添削被下難有奉謝候 又々恐入候得共大井、読書、桃山の發電所紀功碑御願申上候處秘書のもの差上候間御引見被下度願上候頓首 十月念三 福澤桃介 蘇峯先生侍史

『西洋文明の没落』を読む

福澤論吉翁は、日本に於ける西洋文明の輸入者として、宣伝者として、其の魁なき迄も、魁の一であつた事は、何人にも異論はあるまい。然るに其の養子である福澤桃介君は、『西洋文明の没落、東洋文明の勃興』と題する冊子を公にして、西洋文明口葬の悼歌の一節を、世上に提唱す。(中略) 桃介君の西洋文明没落説は君が明言したる通り、決して君一家の私言ではない。寧ろ近頃西洋に流行する一種の議論にして、流石に機敏なる桃介君は、その所説の提要を、本書に列記しているは、地下の乃翁が、定めし這兒や畏る可しと、舌を噛むであらう。実を云へば、君の議論は、世人が首肯せしむるには、余りに荒ら削りであり、余りに大雑把である。併し能く其の要領は得ている。所謂表面人道的基督教文明、裏面殺人奪掠文明の全面とは云わざるも、其の半面だけは、遠慮会釈なく、之を剔抉して、遺憾なきに幾きものがある。(中略) 本文の記者の如きは、三十年來此の議論を唱道したるも、未だ十分に世間に貫徹せざるの恨みがあつた。然るに桃介君の如き、其道の人にして、此論を做す。必ずや世の所謂の実業家諸君は、假令全然その論に、點頭せざる迄も、十二分に考慮するを遅延せぬであらう。(「日日」より) 昭和七年三月十九日 徳富猪一郎記

服部 金太郎 (一八六〇〜一九三三 万延一年〜昭和九)

江戸

明治・大正期の実業家。十四歳より時計店につとめ時計の修繕販売に従事。明治十四年独立して服部時計店を開業した。明治二十年銀座四丁目に進出。明治二十五年精工舎をおこし、掛時計、懐中時計、目覚し時計の製造に着手。欧米の技術を学び国産時計製造業発展に尽くし、ついに外国製品に比肩しうる精巧品の製造に成功。「一人一業主義」を守り終始時計事業に専念した。また赤十字社をはじめ各種社会事業に貢献した。

〔展示書簡〕大正十三年二月十六日付 芝区白金三光町より

拜啓 愈々御清安奉賀候 陳者去十四日帝國ホテルへ御衷招を蒙り大谷光瑞師之有益なる御講演を拝聴し感佩之至ニ奉存候 不取敢御礼まで 如此御座候 敬具 子二月十六日 服部金太郎 徳富猪一郎殿

森永 太一郎 (一八六五〜一九三七 慶応一年〜昭和十二) 肥前(佐賀県)

大正・昭和期の実業家。こんにやく行商を経て、明治十二年陶器問屋堀七商店に入る。明治二十一年渡米。徹しい人種差別の中でキリスト教に入信し、伝道を決意して帰国。三カ月後再び渡米し、製菓技術を学び、明治三十二年東京で開店。明治四十四年森永製菓と名づけた。大正十一年森永製品販売、大正十五年森永薬品を設立し、社長に就任。キャラメルはじめ、洋菓子製造の先駆者となった。晩年は会社経営の第一線から退き、キリスト教の伝道を行い、全国の教会や学校を講演して廻った。

〔展示書簡〕大正十三年二月十一日付 東京府下北品川より

徳富蘇峯先生

大正十三年二月十一日

森永太一郎

益々御壮栄之段奉欣賀候 昨夕刊「風袋乎実力乎」は小生近来に於て乍失礼最も我が意を得たるものに御座候 日本のためには適切な金言故小生の記憶より取り去られなしと信じ候 小生近頃少々不快にて茅屋に籠り居り候故浅学をも省みず「家畜奨励論附産業振興策」と題し小生の実験上より五十二項に頒つて最後に「日本は人爵に重きを置くから世界の趨勢より遠ざかりつゝある 換言すれば頭が古くなりつゝある云々」と書き添へたる處に此御議論を読み痛快に感じ候 就ては家畜奨励論の一項目中に国民新聞紙上に掲載しありし大谷光瑞氏の対支播議中の一二句を引作致し失敬仕候 小生近頃再び「印度南洋旅行記附海外発展の策」として原稿草案中故「風袋乎実力乎」も一寸失敬致し度ものと考へ居候 御許し置きヒ下度候 「我れ我がためにパアルに跪かざるもの七千人を残せり」と旧約聖書エリヤの予言に有ると思ひました 人爵なる偶像を崇拜せざるものも隠れたる日本人中には在之候 終りに先生の御健康を禱る草々頓首 (註) エンゼルマーク入りの森永製菓株式会社用箋使用

星 一（一八七三〜一九五一 明治六〜昭和二十六） 福島県

大正・昭和期の政治家・実業家。明治二十七年渡米して、コロンビア大学を卒業し帰国。星製菓を創立して製菓業を手がける。星薬科大学の創設者。明治四十一年衆院議員に当選。政党内所屬せず独自の活動を行った。作家星新一は長男。

① 昭和十年五月九日付

謹啓 五月八日附の書留の御手紙拝受 当日大声にて読上げます。頭山・杉山両氏に先生の處に御願に参つたことを話しましたら 大に喜ばれました。全く天災と存じ兩人に無事を伝えます。 拝具  
昭和十年五月九日

〔註〕星製菓株式会社工場と星製菓商業学校及び宿舍の絵葉書使用

② 昭和十六年四月三十日付 品川区西大崎 星製菓株式会社より（印刷）

昭和十六年四月三十日 星製菓株式会社社長

財団法人星薬学専門学校理事長 星一

徳富猪一郎様

拝啓 益々御健勝賀上げます。陳者会社創立以来の念願たる星薬学専門学校が、去る四月十八日認可され早速学生募集に着手し、五月六日から開校することになりました。本校は欧米亜細亞諸国の留学生をも包容し世界一の薬学校にしたいのであります。就いては学校に対する各位の御意見も伺ひ御指導も仰ぎ度く存じまするに據て御多忙中恐れ入りますが、五月十八日（日曜日）午後五時半 丸ノ内日本工業倶楽部に御光臨の程御案内申上げます。五月十八日は星薬学専門学校の記念日にいたしたいのであります。幸に御貴臨賜らば光栄に存じます。 拝具

〔註〕 追伸（印刷）一枚あり

御木本 幸吉（一八五八〜一九五四 安政五〜昭和二十九） 伊勢（三重県）

明治・大正・昭和期の実業家。うどんを売り歩いているうちに、水産物に興味をよせ、志摩半島で真珠を採り始めた。明治二十九年多徳島に真

珠の養殖場を設けて研究を重ね、明治三十八年真円真珠を完成し特許を得る。ミキモトパールは広く海外に輸出された。

〔展示書簡〕 昭和三年十一月十一日付 三重県鳥羽町より

拝啓 益御清穆奉賀候 陳者此度之御大典に際し御勲功に依り特に御叙勲の御沙汰を拜せられ誠に御名譽の御事と奉存候 玆に謹んで御祝辞申上候 敬具  
昭和三年十一月十一日 御木本幸吉

徳富猪一郎様

三島 海雲（一八七八〜一九七四 明治十一〜昭和四十九） 大阪

大正・昭和期の実業家。カルピス株式会社の創業者。大阪府箕面市の教養寺住職の長男。西本願寺文学寮で学ぶ。在学中、杉村楚人冠の教えを受けた。英語教師になったが、仏教大学に編入。明治三十五年中国大陸に渡りさまざまな事業を試みた。旅先のモンゴルで、当地の遊牧民たちが毎日のように飲んでいた乳酸菌で発酵させた“酸乳”に出会う。大正四年中国での事業を手放して帰国。大正八年にモンゴルの酸乳をヒントに乳酸菌飲料「カルピス」を売り出す。

〔展示書簡〕 昭和十五年十一月十四日付 東京市目黒区より

肅啓 晩秋之候二御座候處愈々御清適之段奉大慶候 陳者今夏山中双宜荘に於て御願申上候函書の儀 御多忙中二も不拘 御染筆賜はり昨日正二式幅落手仕候 時恰も皇紀式千六百年の祝日当日二御染筆賜はるゝ事とて御気分之爽かなりし為めにや 御筆跡も殊の外結構二拝見仕候 愚弟加藤昇三二代り謹て厚く御礼申上候 一筆御礼申度如此二御座候 敬具  
十一月十四日 三島海雲 拝  
徳富蘇峰先生侍史

森下 博（一八六九〜一九四三 明治二〜昭和十八） 広島県

明治・大正・昭和期の実業家。森下仁丹創業者。宮司の長男として生まれたが、父が煙草の製造販売に転職し、九歳になる頃には、奉公に出された。満身に学校に通う事ができなかつたが、福沢諭吉の著作物を読



み、その開明的考え方に影響を受けた。明治二十六年二十四歳の若さで独立し、業種商「森下南陽堂」を創業。福沢諭吉が新聞広告の重要性を説いていたことを受け、広告を重要視した販売戦略を掲げた。商標にドイツ宰相ビスマルクを使用し、日本で初めて日刊紙各紙に全面広告を出した。その後、家庭保健業の研究をすすめ、明治三十八年に「仁丹」を発売した。仁丹のネーミングは儒教最高の徳とされる「仁」と、台湾で丸薬に使われていた「丹」の文字を組み合わせたもの。卓越したアイデアマンで「日本の広告王」と称された。

〈展示書簡〉（一）年九月二十二日付

謹啓 秋気清爽の砌益御健勝奉慶賀候 陳者今回西郷翁之遺訓出版に付御繁忙裡御迷惑をも不顧無難にも題字御揮毫を奉願上候處幸二速刻御快諾被成下御投恵を蒙り御高庇二より宝典更二光彩陸離たるを得且つ翁之御命日二新聞広告の通り全国学校へ配呈の手続を了し所期の目的を相達し得られ候段洵二感荷の至り二不堪衷心より厚く御礼奉申上候 就ては見本御瀏覽二供し度別途尾間氏宛て御送り申上候間御高了被成下度希候 先八以書中不取敢右御挨拶申上度如此御座候 敬具

九月二十二日 打出濱 森下 博  
徳富先生 玉稿下

岩崎 弥之助（一八五一〜一九〇八 嘉永四〜明治四十二） 土佐（高知県）  
明治期の実業家。岩崎弥太郎の弟。三菱財閥の二代目総帥。アメリカに留学し、帰国後三菱商会の副社長となる。後藤象二郎の長女早苗と結婚。兄弥太郎の事業を助けるとともに、三菱の多角化に尽力。明治十八年弥太郎の死後、銀行、倉庫、地所、造船などの事業を興した。学問を好み、蔵書家、美術収集家としても知られた。重野安繹を師として漢学を学び、古典籍を収集し、自邸内に「静嘉堂文庫」を設けた。

静嘉堂文庫について

財団法人静嘉堂は、岩崎彌之助と小彌太の父子二代によって設立された。およそ二十万冊の古典籍と五千点に及ぶ和漢の古美術品とを収蔵する。これらの文化財の収集は、明治の西欧文化偏重の世相の中で、軽視されがちであった東洋固有の文化財を愛惜し、その散亡を怖れた彌之助により明治二十五年頃から本格的に開始され、

さらに嗣子小彌太によって拡充されたものである。（財団法人静嘉堂案内より）

〈展示書簡〉明治三十年八月八日付

拝啓 故伯爵後藤象二郎葬送之節者炎暑無御厭遠路之處態々御会葬被成下忝ク奉存候右御礼申上度如此御座候 敬具  
明治三十年八月八日  
親戚 岩崎弥之助 大江卓 若山鉦吉 長与称吉 吉田正春

岩崎 小彌太（一八七九〜一九四五 明治十二〜昭和二十） 東京

大正・昭和期の実業家。三菱財閥四代目総帥。東京帝国大学法科中退、明治三十八年ケンブリッジ大学卒業。造船、製鉄、電機、内燃機、重工業、化成などの各企業によって、三菱を日本最大の重工業企業集団に成長させた。三菱経済研究所、成蹊学園を設立した。戦後のGHQによる財閥解体に最後まで抵抗を続けた。

〈展示書簡〉大正四年十一月十五日付

拝啓仕候 晩秋之候益々御清適奉慶賀候 陳者小生二対シ今回不図叙勲之御沙汰御発表相成候處早速御祝詞ヲ寄セラレ御厚志奉深謝候 不取敢御礼申述度如此御座候 敬具  
大正四年十一月十五日  
国民新聞社長 徳富猪一郎様  
岩崎小彌太

藤原 銀次郎（一八六九〜一九六〇 明治二〜昭和三十五） 長野県

大正・昭和期の財界人・政治家。「松江日報」に入り主筆をつとめたが、二十六歳の時、三井銀行に移った。明治三十年富岡製紙所支配人、明治三十七年三井物産木材部部長。この頃からパルプに通じ、明治四十三年王子製紙の危機を救うため専務として入り、富士製紙・樺太工業に對抗した。大正九年王子製紙社長に就任し、大恐慌をへて、富士・樺太との合併に成功し、「製紙王」の異名をとった。昭和十三年引退し、私財八百万円を投じて、人材育成を目指して、藤原工業大学（のちの慶応義塾大学工学部）を開校した。昭和三十四年には科学技術振興に寄与することを目的とした藤原科学財団を設立した。

〈展示書簡〉昭和二十八年十月十一日付 東京白金今里町より

拝啓 平素は御疎遠ニ打過申訳の次第も無之候処 先生ニハ益御壮健の御様子を拝し国家の為誠ニ仕合の事と祝賀不斜存居候 今回不肖私の為ニ思かけもなき御書面を頂き夢かと許り驚き唯々涙ニムセヒ居候 今はなき父母兄弟ニ拝見せしめ候ハバ如何ニ喜可申か家宝として子孫ニ伝候ハバ永久の教訓之ニ過くものなからん等彼是御礼の申上様も無之唯々感涙致居候 何れ拝面の折も候ハバ親しく御礼可申候 不敢取御礼申上度 御恥カシキ不文を顧みず如斯ニ御座候 拝具

十月十一日

藤原銀次郎

蘇峰先生

尚々私の郷里の名産林ご少許鉄道便を以差上候間御合被遊度為念申上候

小泉 信三（一八八八〜一九六六 明治二十一〜昭和四十一） 東京

大正・昭和期の経済学者。今上天皇皇太子時代の師父。慶応義塾大学塾長。

〈展示書簡〉昭和十五年六月 横浜市港北区日吉町（助藤原工業大学より）（印刷）

拝啓 時下愈々御清祥奉賀候 陳者本大学は昨年開校以来以御蔭諸事順調に相運居候是偏に平素の御高配の賜に外ならずと深く感銘罷在候 去る六月十七日は開校一周年に相當致候に付時節柄授業関係者及び学生のみにて至極簡素なる記念式を挙行致候 愈々第二年度に入り学部創設等益々多事を極むる事と可相成申候に就いては何卒今後共一層の御後援を賜り度 此段御願申上候 先は右御挨拶申上度如此御座候 敬具

昭和十五年六月 財団法人藤原工業大学 理事長 藤原銀次郎

学長 小泉信三

徳富猪一郎様

藤山 雷太（一八六三〜一九三八 文久三〜昭和十三） 佐賀県

明治・大正・昭和期の実業家。長崎師範・慶応義塾卒業後、県議會議員となる。明治二十五年に福沢諭吉の紹介で三井銀行に入り、中上川彦次郎を助けて三井財閥の改革にあたる。芝浦製作所所長に就任、さらに王子製紙会社の乗っ取りを行う。三井を去った後、東京市街電鉄・日本火災・帝國

劇場の創立に参加。明治四十二年、渋沢栄一に乞われて日糖疑獄後の大日本製糖の社長に就任してその再建に成功、「糖界の霸王」といわれた。財界の巨頭として東京商業会議所会頭をつとめ、国際交流に力を尽した。

〈展示書簡〉昭和二年八月二十七日付

拝啓 残暑の候 益々御清栄之段奉賀候 過日ハ拙著南洋叢談御高評を賜り難有奉存上候 小生玉川の傍らにて栽培致させ候粗果持たせ遣し候間御賞味被成下候ハバ仕合ニ存候 先ハ右申上度如此候 頓首

八月二十七日

藤山雷太

徳富先生 玉机下

団 琢磨（一八五八〜一九三二 安政五〜昭和七） 福岡

明治・大正・昭和期の実業家。三井財閥の統率者。父は福岡藩士。明治四年渡米。マサチューセッツ工科大鉱山学科卒。東大助教などを経て、明治十七年工部省に入省、三池鉱山局に勤務した。同鉱山の三井払下げに伴い、三井に移る。大正三年益田孝の後任として、同社理事長に就任。日本工業倶楽部理事長等、財界団体の役員を数多く兼ねた。昭和七年血盟団員菱沼五郎に三井本館前で射殺された。

〈展示品〉大正三年年十二月廿日 市外千駄ヶ谷町原宿より

拝復 時下益冬之候益御清穆奉慶賀候 陳者今秋御大礼被為行候際不肖不料も授爵之御沙汰を蒙り天恩之優渥なる只管恐懼之至りニ奉存候 右二付早速懇懇なる御祝詞並ニ斯界ニ多大之賞讃を博せられ候 大著近世日本国民史既刊全部御惠贈を忝うし候段光栄不遇上右好固之記念として製蔵永く御芳志相伝へ可申候 乍略儀以書中不取敢御礼申上度 如此御座候 頓首 十二月廿日 団琢磨

徳富猪一郎殿 侍史

実業界に於ける大損失

翁は貧にして詔はず、富んで驕らず。身は大財閥の管理者として、志は天下國家の上に存した。其の科学的出身たるが故に、徹上徹下合理的の言動より逸しなかつたが、然も翁は日新の知識を貪求すると同時に古代美術の醇酒に陶醉するを禁じ得なかつた。然り彼は冷かなる科学の権化でなく、一個の真人間であつた。筑前には明

治以来、往々異種異様の人物が輩出した。然も其の尤も異形を放つたるは、一方には頭山翁あり、他方には團翁なりと云はねばならぬ。翁の賢明なる識見、翁の中庸なる判断、而して翁の無私なる考察等は、単に実業界の希賈たるばかりでなく、国家大體の上にも亦た然りであつた。然もそれよりも我等が尤も愛惜禁する能はざるは、我が実業界に於ける清涼剤とも云ふ可き翁の紳士の氣品を、翁と與に墓中へ葬らねばならぬことだ。知らず翁に次いで興する者、それ何人ぞ。（『日だより』昭和七年三月八日 徳富猪一郎記）

安田 善次郎（一八五八〜一九五四 天保九〜大正十） 越中（富山県）

明治・大正期の実業家。安田財閥の創設者。父は富山藩下級藩士。二十歳で江戸に出、丁稚奉公の後、元治一年両替屋安田屋を開業し、明治九年第三国立銀行、明治十三年には安田銀行を設立した。以後兩行を軸に数多くの銀行を吸収合併し、金融業中心の安田財閥を一代で築き上げた。浅野財閥との関係は親密で、同財閥に巨額の投融资を行った。社会・公共事業にも尽力し、晩年は東京大学安田講堂、日比谷公会堂を寄付した。大正十年大磯の別邸で国粹主義者朝日平吾に刺殺された。

〈展示書簡〉 明治四十年七月付

拜啓 盛暑ノ節ニ御座候處愈御清穆被為涉奉賀候 借先年第九銀行恐慌ニ陥リ候際 御高慮被遣候未其整理ヲ老生ニ託セラレ再来経営六年ノ久シキニ涉リ茲ニ始テ豫期ノ如ク円満ナル整理ノ結了ヲ告ケ幾百ノ取引先幾千ノ預金者ニ対シ毫末ノ損害ヲモ不相懸芽出度肥後銀行合併致事ニ相成候ハ 老生ノ欣喜措ク能ハザル所ニテ尊台ニ被為於テモ定メテ御同感ノ御事ト奉拝察候 此有終ノ美ヲ告ケ候ハ畢竟尊台ノ御厚配ト御援助ニ因リ候次第二テ株主ハ勿論老生ノ感佩致候處ニ御座候 依テ右記念ノ為メ輕謝ノ至リニ候得共別封ノ粗品進呈仕度候間御受納被下候ハバ本懐ノ至リニ候敬具 明治四十年七月 安田善次郎 徳富猪一郎様

原 富太郎（号・三溪）（一八六八〜一九三九 慶応四〜昭和十四） 岐阜県

明治・大正・昭和期の実業家、美術収集家。旧姓青木。東京専門学校（早稲田大学）で政治・経済学を学び、跡見女学校の教師をつとめた。明治二十五年横浜の豪商・原善三郎の孫・屋寿と結婚し、原家の家督を

継ぐ。横浜市を本拠地とし、絹の貿易により富を築いた。また富岡製糸場ほか製糸工場を各地に持ち、製糸家としても知られた。大正九年横浜興信銀行（現横浜銀行）の頭取になる。明治三十年頃より古美術の収集を始め、国宝級の古美術から重要文化財を含む古建築まで収集。横浜本牧に三溪園を作り、園内にその一部を公開した。美術品の収集家として知られ、速水御舟、安田靉彦、前田青邨らを物心両面にわたり援助した。岡倉天心とも交友し、自らも余技に絵を描き、晩年茶人として知られた。関東大震災後は横浜市復興会の会長に就任した。

〈展示書簡〉 昭和十二年九月二十二日 横浜本牧町より

秋気爽涼 先生筆硯佳御清安奉恭賀候 昨日ハ兼てより鶴首仕居候臨春閣額面野村君を通して御惠贈被成下拜手仕候 養古志勁一嘘雲を吐くの概呈ニテ御常鱗凡介の企及する處ニハ無之敬服感喜仕候 此ハ木額に彫刻し臨春閣と共に永く保存可仕厚く御礼申上候 扱先生御著述も益々順境ニ進行被遊慶賀此事ニ御座候 小生も過般迄二度ハ通読仕候得共老來記臆消耗仕候為め今一回通読仕度昨今相始め居申候 国民史御完了の上ハ更ニ推古朝以後の歴史御執筆被下候得ハ国民ノ幸慶此上も無之事に奉存候 先生ノ御長寿御健康を衷心より祈り居申候 果又過般鈴木煙洲先生より先生之御撰文を書すべく何故か書ニ得ざる小生ニ強命有之聊当感仕候得共他の意味に於て無止執筆仕候 昨今先生之御揮毫を拝して蜻蛉遙ニ老龍を望むの感有之今更慙愧ニ堪不申候 何卒御寛恕奉願上候 不取敢御礼迄申述候 早々敬具 九月二十二日 原三溪 徳富蘇峯先生 玉案

浅野 総一郎（一八四八〜一九三〇 嘉永一〜昭和五） 越中（富山県）

明治・大正期の実業家。浅野財閥の創設者。種々の商売に失敗し、二十四歳で東京に出走。砂糖水売りから石炭商を経て、その間知遇を得た渋沢栄一の斡旋により、浅野セメントを起こした。大正中期にかけて多角の展開を遂げ、一代で浅野財閥を築き上げた。金融面では、安田財閥の安田善次郎に依存するところ大であり、両者の提携により大正二年着手された神奈川県鶴見・川崎沿岸の埋立工事は、昭和二年に完成し、京浜工業地帯の中核をなした。大正九年に科学技術教育と実用的な語学教育を目的とした浅野総合中学校（現浅野学園）を創設した。初代校長は同志社卒で新島襄の遺志を受け継いだ水崎基一であった。

〈展示書簡〉 大正四年十一月十四日（印刷）

恭賀新年 併せて倍旧の御高庇を賜はり度 偏に奉希上候 敬具

大正七年一月元旦 東洋汽船株式会社 社長 浅野総一郎

〔註〕 東洋汽船・天洋丸のカード使用

大倉 喜八郎（号・鶴彦）（一八七八〜一九四八 天保八〜昭和三） 越後（新潟県）

明治・大正期の実業家。父は新発田藩の大名主。十八歳で上京、乾物屋を営んだ後、慶応元年大倉屋銃砲店を開業、戊辰戦争に際し官軍御用をつとめて巨利を得る。明治六年大倉組商會を設立し、貿易業に着手。七年の台湾出兵や日清・日露戦争で軍の用達商として活躍した。朝鮮・中国における投資にも積極的で、帝国ホテル等も含め内外に多くの事業を展開し、大倉財閥を築いた。また、教育にも関心をもち、明治三十三年大倉商業学校現東京経済大学を創立。大正四年男爵となる。長年に亘つて収集した古美術・典籍類を収蔵・展示するため、大正六年に大倉集古館を建設した。これは日本で最初の私立美術館である。

〈展示書簡〉 明治三十八年九月七日付

拝啓 此度一兩日之騷擾八言語同断ノ次第と奉存候 殊ニ貴社御迷惑ノ段 奉拝察候 幸ニ格別ノ大事ニ不至引統発刊相成候間先以安慮上申候 不取 敢右御見舞迄以寸毫如此御座候 早々敬具

九月七日朝

徳富先生 梧石

鶴彦

実業界の怪男児（昭和三年四月二十八日 鶴彦翁告別式の日）

翁は固より打算者たると同時に勇者であった。翁に取る可きは此の勇氣だ。而して同時に幾片の稚氣があった。此の稚氣が、能く翁を世間に繋いだ。要するに翁は一切を乗除して、現代の実業界に於ける快男児であった。

（『人間界と自然界』徳富猪一郎著）

小林 一三（一八七三〜一九五七 明治六〜昭和三十二） 山梨県

明治・大正・昭和期の実業家。阪急グループの創業者。慶応義塾卒。沿線地域を發展させながら、鉄道事業との相乗効果を上げる今日の私鉄経営のビジネスモデルの原型を作った。阪急ブレーブス・宝塚歌劇団創始者でもある。

〈展示書簡〉 昭和十一年七月廿日付 東京市芝区 東京電燈株式会社より

徳富先生 七月五日 小林一三

益々御清栄奉賀上候 小生の旧友にて台湾の砂糖会社にて出世いたし候 金行二郎君貴地に避暑可致折柄先生に御拝顔御高話うけたまはり度希望にて折角御休養中をさまたげ候事ハ申訳無之候へ共御差支なき時御遇ひ 被下度御紹介方々御願まで 如此御座候 以上

〔註〕 封筒表 富士山麓 徳富先生侍史 金行二郎君持参

小林一三君に就いて

小林君は何よりも、「自己に信頼する」一人だ。天才ではあるが、安全なる天才だ。何となれば君の天才は、双翼を鼓して、半天に飛揚するではなくして、両脚を一步毎に踏みしめつゝ、寸より尺、尺より丈に進むからである。云はゞ武田信玄の兵法を、處世の上に應用するからである。其の先見の明も、恒に遠からず、近からざる適度に於て働いてゐる。君は七分通り甲州氣質の持主であるが、自餘の三分は、甲州氣質以外の或物を持つてゐる。それは人間味である。其の人間味に加味して、亦た貴き教養がある。此處に小林一三の真面目がある。（『人物景観』徳富猪一郎著）

五島 慶太（一八八二〜一九五九 明治十五〜昭和三十四） 長野県

大正・昭和期の実業家。東急グループ創設者。数々の会社買収で「強盗恵太」の異名をとった。鉄道事業では優れた経営を行い、阪急電鉄の小林一三と並び、「西の小林・東の五島」と称された。

〈展示書簡〉 昭和十九年二月 東京都渋谷区長谷戸より（印刷）

拝啓 曩に国寶「賦譜・文筆要決」複製一巻呈上仕候處右解題此の程出来 申候に付き同封御送附申上候間御参考とも相成り候はゞ幸甚に奉存候

昭和十九年二月

五島慶太

徳富猪一郎殿

〔註〕 「国寶 賦譜文筆要決解題」同封

根津 嘉一郎（一八六〇〜一九四〇 万延一〜昭和十五） 甲斐（山梨県）

明治・大正・昭和期の実業家。東武鉄道社長。多くの鉄道敷設事業に関わり「鉄道王」と呼ばれた。昭和四年、蘇峰の「国民新聞」の社長を引き受けた。

〈展示書簡〉(一)(一)年三月二十八日付 東京市赤坂区青山南町より

拝啓 愈々御清祥奉賀候 陳ハ先日朝鮮旅行より持帰り居候品土産ノ印迄に乍差少拝呈仕候間御笑味被下候へば本懐ノ至ニ存居候 先ハ右迄 草々 拝具

三月廿八日

徳富先生 御執事

根津嘉一郎

馬越 恭平 (一八四四〜一九三三 天保十五〜昭和八) 岡山県

明治・大正・昭和期の実業家。三井物産に勤務し、大日本麦酒(日本麦酒、朝日麦酒、札幌麦酒の合併会社)の社長を務めた人物。大日本麦酒の大合同合併を画策し、「日本のビール王」とよばれた。

〈展示書簡〉(一)(一)年十一月二十八日付

肅啓 秋冷ノ節益御清適奉口寿候 陳ハ先月上旬各社用向ニテ朝鮮地方出張数年ノ大患後久方振長旅行無異帰京仕候 随テ該地産ノ粗品献呈ス御笑味賜候ハバ幸甚ノ至ニ奉存候 以參御窺可申上苦ニ御座候得ども乍略儀書面ニテ平素ノ御無音御詫迄ニ不取敢右ノ段謝尊意致如此御座候 敬具

十一月廿八日

徳富猪一郎様 侍史頓首

馬越恭平

相馬 愛蔵 (一八七〇〜一九五四 明治三〜昭和二十九) 長野県

明治・大正期の実業家。蚕種製造に携わる。明治三十四年上京し、本郷中村屋を譲り受け、パン屋を始め、明治四十年新宿に開店。良夫人は中村屋の切り盛りのみならず、「黒光」と号して活躍。内助の功をもって愛蔵を助けた。ロシアの無政府主義の盲目の詩人エロシエンコや亡命中のインド革命の志士ラス・ビバリ・ポースなどが出入りした。ポースには長女俊子を嫁がせた。これが本場インドのライスカレーとの機縁となり、新たに中村屋の名物となった。

〈展示書簡〉 昭和二十六年十月十五日付 東京都武蔵調布町より

拝啓 久方ぶりにて御芳墨に接しなつかしく忝く存じました。貴命の如く相共に五六十年を過せし事は天の恵と感謝の外ありません 然し先生の

如く其半身に先立られし御淋しさは充分御察し出来ます 先年御二方に

て我中村屋へ光来を忝せし事を思ひ起して一入御なつかしと存上ます 唯今店員に命じて御二位を記念す可き物と整せしめましたれば御霊前に御供して頂きます 先年御配慮を煩はせし豊寿(佐々城豊寿)伯母は彼の当時四十九才の若さにて他界致しましたが、悲劇の主人信子(豊寿の娘・国木田独歩の妻)は七十四才の高令を以て今年春他界致しました 一番弱虫とされし国光、良が七十六才尚元氣にて草硯に親しみ今回主婦之友社より出版せし夫婦教育を筆を加へて重版する事となりました 亦大に御配慮を煩しラス・ビハリ・ポース氏昭和廿年一月逝去今年七週忌を営みました 此の期に際して、渠の伝記を世に残し度国光が其の筆を運んで居ります 近く出版の日も可有之可然御声援を御願上申上ます 渠は妹の病氣を見舞う為め仙台に旅行中でありましたので失礼致して居ります 私拙著一商人としても昨年末重版して忽ちに再版になりました。偏二先生方の御推挙によりし者と存じて居ります 其之内錦地に趣き直接御礼を申上げ度く存じ居りますが、不取敢御無沙汰の御詫申上度草々 昭和廿六年十月十五日 相馬愛蔵

## ② 徳富蘇峰の書

時艱思偉人 蘇臾九十一(軸)

自主日本 昭和大吉羊歲元旦 蘇臾九十三 静峯賢友正之 (軸)

当道遺線諸公二任ス私ハ仮睡ノ五百年 頑蘇八十七(軸)

天意憐幽艸 人間重晚晴 昭和十八年六月念七 老蘇八十一(軸)

欽仰帖 『新島先生三十八年忌』の原稿と平福百穂のスケッチ画

■新島先生三十八年忌(二月二十三日)

例年一月の下旬に近く毎に、無量の感慨が沸く。それは明治二十三年一月廿三日、大磯に於て、新島先生を亡うたことが憶起せられて。

先生の永眠と我が国民新聞の出生とは、間髪を容れなかつた。実を云へば、先生は我が国民新聞創立の計企に、最も同情を表したる一人であつた。予は新島先生の力を假るつもりは無かつたが、其の同情は、無情の至宝であつた。

明治二十三年一月廿一日の午後、予は同夜芝公園三縁亭に、国民新聞創立披露の爲めに、吾社と交際ある、若しくは新聞に関係ある人々を招待したれば、主人側として、出席前フロックコートを着け、面を剃る可く、瀧山町の床屋に赴き居たるに、危篤の急電が大磯から到着した。

予は来賓接待の事は、湯浅治郎君に托し、大磯に馳せつけた。但だ此事を牧師小崎弘道君に通知するだけは忘れなかつた。何となれば、予は所謂基督者でないから、先生の最後に立ち合ふには、牧師の必須に気付たからだ。

爾来廿三日午後二時二十分、先生の永眠迄はフロックコートの儘、先生病床の側に、夢の如く過した。斯くて先生の遺骸は京都に去り、予は東京に還り、国民新聞の第一号は、同年二月一日を以て発刊せられ、今日迄依然として持続してゐる。

先生は天保十四年正月十四日、江戸にて生れた。明治二十三年一月の永眠は数え歳で四十八であつた。人生五十と云ふも、尚ほ二年餘を剩した。若し今日迄生存するとせば、八十五歳である。八十五歳以上の人にして、即今世の中の爲めに働いてゐる人は、決して少くない。それを思へば、先生は全く寿命に貧しかつた。

記者の一生を顧みて、自から幸福としたるは、第一、明治の聖代に成長したる事。第二、我が父母の子と生れたる事。第三は、善き師友を得たる事。而して其中でも、新島先生と勝先生とは、今にも感激の情が新たである。

誰しも年齢と共に、其の接触したる、若しくは私淑したる人の相庭が高下するものだ。年少気鋭の際に、崇拜したる人も、老となりては、頓に其の興味と、愛着とが消失するものがある。されど新島先生の如きは、今にも記者の胸中に生きてゐる。記者には先生は、到底故人とは思へない。

先生に就て語る可き機会は、他日にあると信ずる。但だ記者は先生に對して、聊か他と見解を殊にするかも知れない。先生の永眠後、長き人生の行路に於て、若し先生にして在さばと思つたこと幾度ぞ。

先生の墓路を書したる海舟翁も、今は洗足池畔の、五輪塔下に眠つてゐる。時も変れば世も変る。白頭の門生、遙かに洛東若王子山頭の一片の石を望み、斯文を獻く。  
(昭和二年一月廿三日) (『人間界と自然界』徳富猪一郎著)

### ③ 蘇峰立像 川端龍子画

川端 龍子 (一八八五—一九六六 明治十八—昭和四十一) 和歌山県

昭和期の日本画家。本名・昇太郎。中学卒業後、洋画を学び、新聞・雑誌の挿絵を描いていたが、渡米してボストン美術館の日本画をみて感動、帰国後日本画に転じた。院展同人に推されたが昭和三年脱退、翌年入会場芸術を唱え青龍社を結成し自ら主宰。壮大な氣宇に満ちた数々の大作を発表し画壇の雄として名をはせた。昭和三十四年文化勲章を受賞。

蘇峰立像 (117 cm × 175 cm)

昭和二十六年蘇峰の米寿を祝して、門下有志が贈った。昭和三十二年に、蘇峰は立像に贊を入れ、添え状とともにこれを塩崎彦市に贈った。

#### 蘇峰画贊

堂々龍子手に信せて描著 梅花香裡 白頭の閑客 神采奕々 浩氣澆々 仙に非ず 俗に非ず 賢に非ず 愚に非ず 独り自ら風格 特殊の骨相 審議すべからず 解説する能はず 留めて後昆に与へ 姑らく宿題となす

昭和丁酉元且

蘇叟九十五

添え状 昭和三十一年一月一日付

恭賀新禧 去年八最近十年中老生二取りテハ尤モ凶歳二候処 貴兄御調護ノ効空シカラス無事迎新 感謝此事二候 却説 御熟知ノ通り老生米寿祝賀ニサイシ 有志各位発起ニテ肖像画御贈與ノ件ハ 特ニ老生ノ意向打診ノ上 川端龍子画伯ニ懇囑 画伯欣然快諾 経営慘澹 独造ノ意匠 奇創ノ手筆 其ノ我等豫想ニ超越セル傑作タルコトハ 当時東京及各地展覽具眼者ヲシテ 欽賞嘆美セシメタルヲ以テ之ヲ知ルニ餘リアリト存候 然ルニ老生モ最早百歳ニ手力届クマテノ遐齡ト相成 此ノ国寶タルヘキ傑作ノ処置ニ付考慮ノ上 貴蘇峰堂ニ寄進シ 一ハ以テ蘇峰堂鎮守ノ護符トナシ 一ハ以テ蘇峰堂ニヨリテ永久ニ保存シ 且ツ社会風教ノ上ニモ効果アラシメ度 御相談ニ及ヒ候処 貴兄モ御承諾相成 イヨイヨ無滯上記ノ通り相濟候儀 老生ニ於テモ安神此上ナク存候 就テハ 貴兄ハ勿論後ノ蘇峰堂ニ主タル御方ニモ 老生所志徹底スル様 春秋ノ佳日ニハ展披ノ上 同志雅会御催フシ又機会アル毎ニ此ノ国寶的傑作ノ存在ヲシテ意義アラシムル様 御肝煎相願申上候 尚申上度事モ候得共 万々紙外御洞察皮度 先ハ新年御祝儀ヲ兼 艸々頓首

昭和卅二年正月初一

蘇叟九十五

蘇峰堂主塩崎静峰賢契 玉机下

### ④ 日本画・平福百穂

平福百穂 (一八七七—一九三三 明治十—昭和八) 秋田県角館

大正・昭和の日本画家、アララギ派の歌人。平福穂庵の子。本名・貞蔵。父に画を習い、十八歳の時上京し、川端玉章の門に入る。東京美術学校卒業後、日本美術院の日本理想主義に対抗して、写実主義を唱える。スケッチ風の筆法を骨格に独自の風格は、すぐれた素質と力量を示す。結城素明らと无声会を組織。その間雑誌、新聞に挿絵を執筆。明治四十年蘇峰の『国民新聞』に入社した。国会の様子をスケッチで報道し、大相撲の似顔絵などを生き生きと描いた。国民新聞社では、七年間川端龍子と机を並べ、同僚には池部均、高浜虚子らがいた。昭和五年文部省絵画研究のため六ヶ月の海外出張が命じられ、松岡映丘(柳田国男の弟)とバリ、ベルギー、オランダ、イギリス、ベルリンなどを周遊した。歌集には「寒竹」がある。

〈百穂とスケッチ画〉

大正三年に発覚した日本海軍とドイツ・シーメンス社との不正取引・贈収賄事件(シーメンス事件)では、野党が一面に山本権兵衛内閣を攻撃し、議会は大いに紛糾した。百穂はこの不正事件に一倍義憤を燃やし、連日鋭い筆法で議場の混乱をスケッチし、紙上報道を続けた。国民新聞の編集局長・伊達源一郎は、「百穂の議会議画で最も有名であり、最も効果的であったのは、シーメンス事件の真最中に山本首相の面相を夜叉の如く、其の頭髪を角の如く描いた、その政治漫画である。この漫画一度出でて議会の形勢は一変し、山本内閣は終に瓦解した。議会の演説よりも、新聞の論説よりも、此の絵が一番攻撃力が強かった。百穂、山本内閣を倒すと云つても過言でない。」と語っている。(『評伝平福百穂』参照)

〈蘇峰と百穂〉

蘇峰は、百穂を国民新聞入社の日から、「百穂先生」と敬意を込めて呼んでいた。蘇峰は百穂芸術を「匠気なく、銜気みせびらかし自慢する」な」と評している。百穂の人柄を好み、よく旅行に同道した。百穂が景色を描き、その横で蘇峰が漢詩を書き、本年度展示中の「野山小景」や「百穂風景帖」といった豪華な旅の記録となっている。大正三年には、『山水随縁記』を民友社から出版。これは、蘇峰と百穂が大正二年六月末から八月にかけて、耶馬溪・瀬戸内海・青龍寺・山中湖などを旅した紀行文と、その場所ごとの印象を描いたスケッチ画で構成されている。

「追憶一片」

大正二年二月桂内閣の瓦解によって予の身辺にも不愉快なことが多かつた。社務を社中の元老達に託して、飄然として平福さんと旅に出掛けた。大正二年初夏の候であった。大阪から別府に赴き、四国を経て小豆島から宮島へ、宮島から京都に回った。宿屋に着けば、頭を没するほど、書画帖などを積み立て、それに平福さんが絵を描かれ、その絵にまた予が賛をするということであった。予も出まかせに其時其時に文句を即時に作つて、無遠慮に大きく、空白に書き込んだ。今から考えてみれば、まことに心無き業であった。その時の平福さんは達者と云わんか、予が一句を書き終らざるに、既に次の幅が出来上つて、予はそれに追いまくられたる姿であった。『山水随縁記』における挿絵は、何れも小品であるが、予の文章の如きは、予の文章の如きは、この挿絵によって全く引き立てられたもので、いわば下手の義太夫語りが、上手の太棹で引き立てられたのと同様である。」(『アララギ平福百穂追悼号』 徳富猪一郎記)

〈展示美術品〉

五松二峯 蘇峰画賛(軸)

白梅(軸)

松落得 蘇峰画賛(軸)

百穂風景帖 蘇峰画賛(帖)

椿(屏風)

『山水随縁記』(和綴本)

野山小景 蘇峰画賛(帖)

牛 蘇峰画賛



明治孟春青龍山に於いて 百穂写進歩難し兮進歩遂に息まず千里更に萬里を問はず、能く極南より極北に達す 蘇峯題

⑤ 淡島椿岳と淡島寒月

淡島 椿岳(一八二三〜一八八九 文政六〜明治二十二) 武蔵川越幕末・明治の画家。日本画は、馬喰町近くの蔵前に画塾を開いていた大西椿年と椿年の師であった谷文晁に師事し、彼の死後は高久隆古に学ん

だ。また、洋画は川上冬崖、高橋由一らの交流を通して学ぶ。鳥羽僧正の「鳥獣戯画」を研究し、独自の「椿岳漫画」を制作。その作品は流麗で洒脱、大変魅力的である。辞世の句は「今まではさまざまな事してみたが、死んでみるのはこれが初めて」

〈展示美術品〉「十二ヶ月図」二幅

淡島 寒月（号・梵雲庵）（一八五九〜一九一六 安政六〜大正五）日本橋本名宝受郎。父は淡島椿岳。若くして西洋文化に親しみ、神田小川町の济世学舎に入塾。英人キーリング博士に学び、髪を赤くしてローマ字の表札を掲げた。一方で江戸時代の文芸に心酔、井原西鶴を明治文壇に紹介するなど、江戸研究者として知られた。旅行好きで幸田露伴ともよく旅した。趣味人として洒脱な絵を描き、また玩具収集家としても有名で「おもちゃ百種」「玩具千種」を画いた。『百美人』『寒月余影』『寒月句集』の著作もある。

〈展示書簡〉 明治二十六年一月付 年賀絵葉書「おめでと〜」と叫ぶオウムを描く。

### 参考文献

- ・『コンサイス日本人名事典（第4版）』平成十三年発行 三省堂
- ・『第一人物随録』徳富猪一郎 大正十五年 民友社
- ・『人物偶録』（蘇峰叢書第六冊） 徳富猪一郎 昭和三年 民友社
- ・『人物景観』 徳富猪一郎 昭和十四年 明治書院
- ・『蘇峰自伝』 徳富猪一郎 昭和十年 中央公論社
- ・『評伝 平福百穂』加藤昭作 平成十四年 短歌新聞社
- ・『大人名事典』昭和二十八年 平凡社
- ・『月刊Asahi』「◎近代日本の異能・偉才実業家100人」

平成五年朝日新聞社

- ・『朝日ワンテーママガジン』「⑩20世紀ニッポン異能・偉才100人」平成五年 朝日新聞社
- ・『日本のリーダー ⑥・⑦・⑧』昭和五十八年 TBSブリタニカ

### 蘇峰堂だより

- ① TBSテレビの特別番組『あの戦争は何だったのか』が平成二十年十二月二十四日に放送され、番組制作にあたり当記念館資料を多数提供しました。番組を見て来館された方も多かったです。
- ② 今年の梅は開花が早く、二月の中旬には満開を過ぎてしまいました。その分、梅園内歩道の両側に咲く水仙は長いこと、香りと花を楽しませてくれました。
- ③ 例年通り、茅ヶ崎の詩吟の会（吟心流）の方々が来館なさり、二階の蘇峰立像の前で「両英雄」、梅園内で「寒梅」を吟じてくださいました。
- ④ 書簡を読むにあたり、茅ヶ崎『塵外館』の皆様に、いつもながらのご協力をいただきました。

### 〈徳富蘇峰記念館案内〉

- 開館日 月・水・金曜日
- 〈特別開館日〉 2月（梅の季節）は 土・日曜日も開館
- 〈特別閉館日〉 年末・年始
- 8月の第3・4週
- 開館時間 午前10時〜午後4時
- 入館料 大人 500円  
中・高生 200円
- 〈団体割引〉20名以上 一割引 450円

平成二十一年四月一日発行

編集 高野 静子  
宮崎 松代  
和田 千枝  
発行者 竹越 起一  
発行所 (財)徳富蘇峰記念塩崎財団  
〒259-0201 神奈川県中郡二宮町二宮六〇五  
TEL 〇四六三二一七一一〇二六六  
FAX 〇四六三二一七一一〇六七七  
ホームページ <http://www.2ocn.ne.jp/~tsoho/>  
E-mail: [tsoho@peachocn.ne.jp](mailto:tsoho@peachocn.ne.jp)